

敬語接頭辞「お・ご」のパラダイムに基づく分析と言語教育への応用
 A Paradigm-Based Analysis of the Honorific Prefixes 'O' and 'Go'
 and Its Application to Language Teaching

藤原美保, ウィラメット大学

深澤はるか, 慶応義塾大学

北原真冬, 上智大学

Miho Fujiwara, Willamette University

Haruka Fukazawa, Keio University

Mafuyu Kitahara, Sophia University

1. はじめに

日本語教育で敬語を教える際、和語の前には敬語接頭辞「お」を付け、漢語の前には「ご」を付けると説明することが多い。しかし、「電話」や「弁当」は漢語であるにもかかわらず「お電話」「お弁当」と「お」が付き、「ご電話」「ご弁当」とはならない。また、「返事」のように「ご返事」「お返事」の両方が使われている単語もある。日本語教師であれば、日本語学習者（以下、学習者）に「なぜ『お弁当』は『ご弁当』でないのか。どんな時に『ご』ではなく『お』を使うのか。」と聞かれ、答えに窮したことがあるのではないだろうか。特に、日本語教師が日本語母語話者（以下、母語話者）であれば、どの言葉にいつ「お」や「ご」を付けるのかは母語話者の直感（*native speaker intuition*）で分かるが、それを教育の場で日本語非母語話者（以下、非母語話者）に明確に説明するのは難しいと考えられる。また、この母語話者の文法性判断に言及する「お」と「ご」に関する先行研究は数少ない。

そこで、本稿では、まず次節において、どのような問題が実際の日本語教育の現場において起こっているのかを振り返る。続いて第3節では、そもそも和語・漢語という語源的な区別が言語理論、特に音韻理論においてどのように扱われてきたかを踏まえて、母語話者にとっても音韻的根拠からのみではそのような区別が難しいことを指摘する。第3節での分析を土台として、第4節では、音韻、音声、統語、形態、意味論などの総合的な文法的根拠から「音韻パラダイム」というものが形成され、同一パラダイム内では、同一の読み方、すなわち「お」もしくは「ご」を使用することを提案する。また、単語音声親密度によって、語源的には漢語であっても親密度が高いものは和語のパラダイムに入り、よって「お」をつける、ということを実証する。さらには、音声親密度以外の要素、統語論的あるいは意味論的な根拠も音韻パラダイムを形成する可能性を示唆する。第5節ではそれらの音韻パラダイム理論を実際の日本語教育にどのように取り入れるのかを考察し、第6節で全体のまとめと今後の課題を示す。

2. 日本語教育における「お」と「ご」の問題点

敬語接頭辞「お」と「ご」について、一般的に日本古来の固有語である和語には「お菓」「お昼寝」のように「お」が付き、中国由来の漢字音を用いた単語に

は「ご飯」「ご苦労」などのように「ご」が付くとされている。しかし、学習者には語源情報がないため、ある単語が和語か漢語かの判断が難しい。

そこで、既存の教科書はいろいろと工夫をしている。例えば『新日本語敬語トレーニング』では漢語という単語を使わずに、「漢字の言葉に『ご』が付く」と説明をしている。たしかに、「和語」「漢語」という言葉は使っていないのだが、和語にも漢字で形成される語があるために混乱を招く。例えば、和語である「昼寝」は「お昼寝」となるのが正しいが、教科書通りだと「ご昼寝」となってしまうのである。

また、「漢字の言葉に『ご』が付く」という簡略化した説明では、それまで「お仕事」と正しく発話できていた学習者が「ご仕事」とあやまった産出をする、という過剰般化が起こってしまうことがある。このような簡略化した説明が通用しない一番大きな原因は、(1)に示すように語源的に漢語であっても「お」がつく語が多数あることにある。

(1) 「お」と「ご」がつく語

- (a) 「ご」+漢語：ご家族、ご夫婦、ご予算、ご意志、ご出席
- (b) 「お」+和語：お飲み物、お手洗い、お見舞い、お気持ち、お祈り
- (c) 「お」+漢語：お電話、お写真、お食事、お弁当、お散

堀尾 (2010) では、(1c) のような「お+漢語」の例を 44 例挙げている。以上のことから、「お」と「ご」の使い分けは語源的語情報だけでは説明がつかないことが伺える。

語源的情報だけで説明できないとすれば、母語話者はどのような根拠から「お」と「ご」を使い分けしているのだろうか。堀尾 (2010) は、「モノには『お』が付く」、つまり「お」が付かない、または「ご」が付くものが例外であると説明しているが、先行研究が少なく、母語話者の文法性判断についてはまだ明らかになっていないのが現状である。母語話者が、自らの文法性判断では、この語には「お」この語には「ご」と答えることはできても、それが実際にどういう言語学的根拠に基づいているのかを明確に答えることは難しい。しかし、非母語話者である学習者に「お」と「ご」の使い分けを指導する際に、日本語教師が母語話者のこの文法性判断のメカニズムを理解することは必要であると考えられる。そこで次節では、まず、音韻論において、和語、漢語等はどのように区別されるのかを見てみたい。

3. 語源的語彙層と音韻的語彙層

3.1 音韻的語彙層と最適性理論

日本語が、語源的に和語、漢語、擬声語、外来語等の語彙層に分かれることはよく知られている。しかしながら、母語話者が日常会話において、これらの語源的情報を意識しながら発話することはほとんどない。また、語源的・歴史的知識をまだ持たない子どももこれらの語彙層を区別していることに鑑みて、語源的語彙層とは独立した音韻的語彙層が存在することが音韻論では指摘されている (Ito & Mester 1999, Fukazawa, Kitahara, & Ota)。無論、歴史的に日本語となった

時代が異なるため、おおまかな語源的分類というのは根拠にはなるであろうが、母語話者の文法性判断はそれよりもさらに複雑である。

音韻論において、音韻的語彙層の根拠は各語彙層特有の音韻現象である。語彙層特有の音韻現象は多々あるが、本稿ではその中から、1) 連濁、2) 鼻音後の有声化、3) 単独[p]の禁止、4) 有声重子音の禁止の4つの現象を例としてあげたい。

(2) 語彙層特有の音韻現象

(a) 連濁：複合語の2番目の語頭は有声化する

和語	城下 + きれい → しろしたがきれい
漢語	抗 + 加齢 (アンチエイジング) → こうきれい
外来語	ビーフ + カレー → ビーフカレー

(b) 鼻音後の有声化：鼻音の後は有声化する

和語	かんがえ、とんぼ
擬声語	しょんぼり、うんざり (「ぼんぼん」などの還元語は除く)
漢語	かんたん、かんぼう
外来語	アンテナ、チャンス

(c) 単独[p]の禁止：[p]は単独では生起しない

和語	ひかり *ぴかり
漢語	ひみつ
擬声語	ぴかっと
外来語	ピンク

(d) 有声重子音の禁止：有声重子音は生起しない

和語、漢語、擬音語	かっぱ、とっふう、からっと
外来語	ヘッド、ウッド

(2) で示されるように、連濁は和語のみで (2a)、鼻音後の有声化は和語と擬声語のみで起こり (2b)、単独[p]が生起しないのは、和語と擬声語のみであり (2c)、有声重子音が起こらないのは和語、漢語、擬声語のみである (2d)。

これらの語彙層特有の音韻現象を最適性理論においては、それぞれの有標性制約が満たされることで説明する。すなわち、Rendaku (連濁) という制約は、和語のみで遵守され、それ以外の語彙層では違反可能であり、PNV (Post Nasal Voicing、あるいは*NT) は、和語と擬声語で遵守され、漢語と外来語では違反可能であり、*[p]は和語、漢語で遵守され、擬声語と外来語では違反可能であり、*DD は外来語のみで違反可能であり、それ以外では遵守される。これらを表にまとめると表1のようになる。表1で、yesは遵守されていることを示し、noは違反可能であることを意味する。

表1 語彙層ごとの制約の厳守

	Rendaku	PNV (*NT)	*[p]	*DD
和語	yes	yes	yes	yes
漢語	no	yes	no	yes
擬声語	no	no	yes	yes
外来語	no	no	no	no

表1にもまとめられるように、この4つの音韻現象は極めて「日本語らしい」現象であり、言い換えれば「日本語らしさ」を作り出している現象である。その4つの有標性制約全てに違反可能な外来語は日本語らしさからは遠いところにある語彙であると言える。特筆すべきなのは、漢語と擬声語である。これら2つは、それぞれ2つの現象では日本語らしく、別の2つでは日本語らしくない、と言うことができる。

3.2 語彙層分類は音韻現象のみからでは不可能ではないか？

3.1節では、4つの語彙層特有の音韻現象を観察し、それを最適性理論がどのように説明するのかを考察した。しかしながら、有標性制約を遵守するかしないか、という情報のみで、子どもは4種類の語彙層を分類できるのであろうか。本稿では4種類のみをみたが、語彙層特有の音韻現象は多数存在する。漢語と擬声語のように、それぞれ異なる制約を遵守したり、違反したりする場合がある。多数の制約を遵守するか否かから、4つの語彙グループに収束させるのは言語獲得における実際的なステップとして妥当性に欠ける。

さらに、それらは例外が多数存在することも知られている。たとえば、連濁の場合、和語の90%、漢語の10%が連濁すると言われている。それはすなわち、和語の10%は連濁しないということであり、連濁しないはずの漢語も10%は連濁するということでもある。これらの例外を子どもは言語獲得の過程でどのように語彙層に分類するのであろうか。

これらのことから、音韻的証拠のみでは語彙層分類は難しいという結論になる。次節では、その代替案として音韻的パラダイム理論を提案する。

4. パラダイム理論

4.1 音韻的パラダイムとパラダイムの統一性

前節では、音韻的証拠のみからでは、4つの語彙層に収束するのは難しいと述べた。その代替案として、純粋な音韻的証拠だけでなく、音声、形態、意味、統語などの総合的な文法的証拠に基づき音韻的パラダイムが形成されることを提案する。考えられるパラダイムとしては、日本語らしい音韻のパラダイム（和語パラダイム）、日本語からは遠い音のパラダイム（外来語パラダイム）、その中間のパラダイム（漢語あるいは擬声語パラダイム）などが考えられる。

どのパラダイムにどの単語が属するのかは、日本語話者であれば直観的な知識（native speaker intuition）により判断ができる。しかし、日本語教育においては、それを非母語話者にどう説明するかが問題である。その1つの指標として「単語音声親密度データベース（天野&近藤 1999）」でそれぞれの語の日本語として

の親密度を測定することができる。親密度データベースは、新明解国語辞典第4版の約 80,000 項目それぞれについて、1~7の段階的スケール（1=全くなじみがない~7=とてもなじみがある）で、約 30 人の評定者の平均スコアを平均したものである。

この単語音声親密度データベースで、「お」+漢語の親密度を測定したところ、全 52 項目の中央値は 5.75 であった。この 52 項目は堀尾（2010）で紹介された 44 語に新たに 8 語加えたものである。比較対象として、「お」+和語と「ご」+漢語も測定してみたところ、前者は 4.58、後者は 3.93 であった。やはり「ご」+漢語は日本語話者にはなじみが薄く、これを狭義の漢語パラダイムとする。興味深いのは、「お」+和語の親密度である。これは「お」+漢語よりも低い。このことから、語源的に漢語である語に「お」がつくためには、和語よりも単語として親密度が高くなっている必要があるという仮説が成り立つ。

このように、「お」+和語、「お」+漢語、「ご」+漢語の単語音声親密度には明らかな違いがある。まとめると、「お」がつく語は親密度が高く、「ご」がつく語は親密度が低いという違いである。そこから導き出される結論として、「お」がつく語は、語源的な違いはともかく、音韻的には広義の「和語」としてパラダイムを形成しており、また「ご」がつく語は狭義の「漢語」として別のパラダイムを形成していると考えられる。さらには **Paradigm Uniformity** (McCarthy 1996、Hayes 2004) により、各パラダイムの中では接頭辞に統一を求めるという文法的な圧力がかかることを提案する。すなわち、広義の和語においては「お」、狭義の漢語においては「ご」という読み方で統一されるのである。

さらに、「お」+外来語（おトイレ、おビール、おソース）なども音声親密度はかなり高いため、親密度を測定すれば広義の和語に分類されるのではないかと推測する。

4.2 他のパラダイムの可能性

堀尾（2010）は、「お」と「ご」に関する広範囲な分析を行っており、その中で、統語的分析という概念を紹介している。たとえば品詞の違いにより「お」または「ご」で統一できれば、それは統語的パラダイムと言える可能性がある。

さらに堀尾（2010）は、「モノ」に関する語には、和語でも漢語でも「お」がつく、という指摘をしている。さらにその「モノ」を細かく分類して、『金銭』（お賽銭、おこづかい、お通帳、お給料等）、『装飾』（お鏡、お鞆、お扇子等）、『家』（お宅、お座敷、お二階等）、『食器』（お杓文字、お皿、お玉等）、『祭礼』（お数珠、お中元、お土産）、『通信』（お電話、お手紙、お葉書）など、意味的パラダイムとも呼べる統一性を示している。これらの語は、全て 4.1 節で考察した音声親密度により、音声・音韻的には広義の和語パラダイムに分類されているが、意味的パラダイムという見地からの分析も可能である。

このように、さまざまな分野の文法的証拠を根拠として音韻パラダイムが形成されることが堀尾（2010）でも補強されている。

5. 日本語教育におけるパラダイムの応用

第4節で提案したパラダイム理論を実際の指導にどのように活かせるであろうか。これまで、多くの日本語教育の現場において、和語には「お」、漢語には「ご」、そしてそれ以外のもの（たとえば「お」+漢語など）は例外として覚えるようにという指導が行われることが多かった。混乱を避けるためにも、初級者にはこのような指導の方がよい場合もあると考えられる。

しかしながら、中級、上級の学生には言語理論的説明および個々のパラダイムの性質を説明することがより理解を深めるのではないかと思う。たとえば第4節でみた、「お」+漢語、「お」+和語、「ご」+漢語の単語音声親密度を紹介するのも有益であろう。また、そこまでしなくとも、意味論的な説明、たとえば金銭に関するものは語源的に漢語でも和語でも「お」がつく等の説明は非母語話者でもわかりやすいのではないか。全てをまとめて「例外」としてリストを示すよりも、それらの項目ごとのリストを表示するのも良い。

6. まとめ

本稿では、外国語としての日本語教育における、「お」と「ご」の接頭辞の指導の困難さを起点として、日本語における語彙層がどのように母語話者の文法性判断から区別されるかを考察し、パラダイムの統一性によって同一パラダイムには「お」または「ご」をつけるという提案を行った。しかしながら、音韻的パラダイムの根拠が総合的な文法的根拠であるという仮説はまだ十分な実証がなされていないために、今後さらに追究する必要がある。それらが明確にならないと実際の教育現場において応用することは難しい。しかしながら、どのようなパラダイムにおいて「お」や「ご」を統一するのかという言語学的説明がなされれば、それを基にデータベースの作成が可能になり、外国語としての日本語教育への多大な貢献となると考えられる。本研究がその第一歩として日本語教育の一助になれば幸いである。

参考文献

- 天野成昭, 近藤公久 (1999) 『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』三省堂
- 金子広幸 (2014) 『新日本語敬語トレーニング』アスク出版
- 堀尾佳以 (2010) 「御(お)と御(ご)の統語的特徴-『お電話』『お時給』はなぜ『お』か-」 『人間科学研究』6, 59-71 北見工業大学
- Fukazawa, H., Kitahara, M., & Ota, M. (1998). Lexical stratification and ranking invariance in constraint-based grammars. *CLS34-2 The panels*, 47-62.
- Fukazawa, H., Kitahara, M., & Ota, M. (2002). Constraint-based modeling of split phonological systems. *Phonological Studies* 5, 115-120.
- Hays, B. (2004) Phonological acquisition in Optimality theory: The early stages. In R Kager, J. Peter & W. Zonneveld (Eds.), *Fixing priorities: Constraints in Phonological Acquisition* (pp.158-203). Cambridge, England: Cambridge University Press.

- Ito, J., & Mester, A. (1999) Japanese phonological lexicon. In Tsujimura, N. (Ed.), *Handbooks of Japanese Linguistics* (pp.62-1000. Cambridge, MA: Blackwell.
- McCarthy, J. J. (1998). Morpheme structure constraints and paradigm occultation. *CLS34-2 The panels*, 47-62.